

遊びを引き出し、 支え、広げる園舎

永井理恵子



幼稚園教育要領の第一章「総則」の第二「幼稚園教育の基本」に、幼稚園教育は「環境を通して行う」ものであると記されていることは、いまさら述べるまでもなく、続いて「教師は、幼児と人やものとのかわりが必要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない」ともあります。

私たち保育者は、「環境」あるいは「物的・空間的環境」と言われますと、まず動植物などの自然的環境、屋外環境を思いつくのが一般的だと思います。さらに少し拡大すれば、教材や遊具などの保育用具、机・椅子や保育家具などまでは、保育の「物的環

境」として意識することもありません。しかし、こと幼稚園の建物、園舎のこととなりますと、普段はほとんど意識することはないかと思われます。とは言えたたとえば勤務先の幼稚園を移ったときに、ふと前の幼稚園の園舎と現在の幼稚園舎とを比較して、使い勝手の善し悪しに気づいたり、他の幼稚園を参観に行ったときに、園舎の様子がまったく異なることに気づいたりした記憶は、保育者の誰もがもっていると思います。日常の保育の中でも、園舎の構造に使いにくい箇所があれば、園舎を意識するでしょう。むしろ、幼稚園の経営・運営にかかわる方々は、幼稚



園を改築・新築する際には、園舎と正面から向き合う機会をもたれることは言うまでもありません。

ここで改めて、一般に保育実践を考えるとときに前面に出てくる機会の極めて少ない園舎について、その歴史や役割などを述べてみたいと思います。

地域から生まれた日本の園舎

日本の幼稚園教育は一般に、明治九年（一八七六）開園の東京女子師範学校附属幼稚園によって開始されたこととなっています。この幼稚園は官立であったため、開園当初から、国家が設計者に依頼して完成した園舎を使用して保育が行われていました。

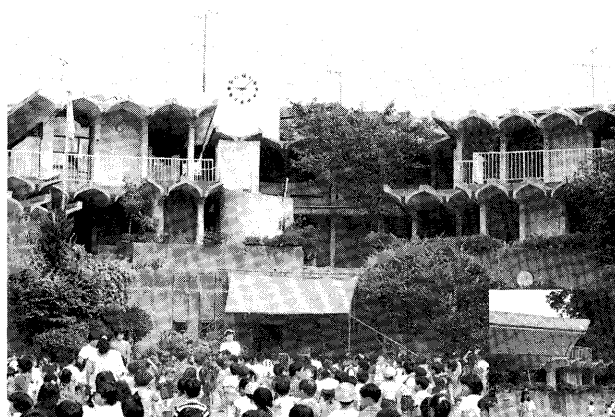
しかし、明治～大正期の日本の多くの幼稚園は、一部の師範学校附属幼稚園を除き、地域の人々によって設立・運営されておりました。国によって義務教育化が目指された初等教育、細かな規制が次々と掛けられていった小学校舎と異なり、地域の人々

や篤志家に任された幼稚園は、園舎にも多様な在り方が許されてきました。明治中期ごろまでは一般の民家や寺社を代用していた幼稚園も、明治後期からは最初から園舎を目的として設計されたものが多く見られるようになりました。明治後期から大正期に建てられた日本の幼稚園舎は、実際の出資者であった地域の人々や設計者の、夢や理想を実現するものであり、地域によって個性豊かな園舎が多くありました。「愛珠幼稚園」園舎（大阪市中央区、一九〇一、現在も保育に使用中）のように、園舎の中には保育者も設計に関与したものも出現しました。

昭和二十～四十年代の戦後復興期、ベビーブームによる子ども数の増加とも相まって、小学校舎は、大人数に対して一斉指導のしやすい教室を配置した、通称「ハーモニカ型」と呼ばれる、四角く画一的なものとなりました。幼稚園教育にも、初等教育の前段階としての教育が期待されるようになり、小

学校舎を小型化した、保育室を一行に並べた園舎が大流行。これは、昭和七年（一九三二）新築の東京女子高等師範学校附属幼稚園舎の形態の基本が模されたとも言えます。同幼稚園舎は、保育室を園舎南側に一行に並べ、保育室の北側に廊下を配置した、基本的には小学校舎と同型のものでした。この園舎は各保育室から園庭へ出られるようにしたという点が当時とても目新しく、屋外活動を重視するようになっていた昭和期の多くの幼稚園にとって非常に使い勝手のよいものでした。そこで昭和七年の附属幼稚園舎を模した平面計画をもった園舎が、昭和四十年代まで全国に次々と建てられていったのでした。

この時期、個性的な園舎を持った幼稚園は、独自の保育観をもった園長が運営する幼稚園など、ごく少数でした。昭和四十年代に建てられた個性的な園舎としては、東京都世田谷区のゆかり文化幼稚園園舎（一九六七）などがありました。この幼稚園では開



▲ゆかり文化幼稚園 外観全景 設計：丹下健三
「子どもの城」と呼ばれる園舎
(すべての場所が遊び場)

1階 3歳児保育室前じゃりテラス▶

園当初から、学級担任制ではなく複数担任制による保育を行っており、保育室は学級単位で決められているのではなく、活動内容ごとによって設定されておりました。当初は園長の自宅を用いて保育を開始、その経験から生み出された保育でした。芸術家であった園長は、保育への高い理想とこだわりをもっており、その思いにつき動かされた設計者は、園長の保育理念を園舎に具現化すべく保育を何度も参観し、園長との対話を重ねて設計しました。

しかしながら、昭和の復興期、日本の幼稚園教育は初等教育と同様、教え込み型的な教育効果の高い一斉保育を選ぶ幼稚園が多く、それに適した園舎が一般には多かったです。

幼児の主體的な遊びを 援助する園舎を目指して

平成元年（一九八九）、幼稚園教育要領の大幅な改

訂が行われ、幼稚園教育の実際は各幼稚園に多くを任せるようになりました。保育の在り方も「遊びを中心とした保育」となり、それまでの就学前教育的な色彩から脱却、幼児にとつての学習そのものである「主體的な遊び」や「環境による教育」が掲げられ、「教える」ではなく「援助する」ことが幼稚園教育の方法として重視されるようになりました。

この時期が、その後の日本の幼稚園園舎の多様化の始まりでありました。戦後に急いで建てられた校舎・園舎に傷みが進んだ時期とも重なり、平成の時代を迎えた日本には、特徴をもった校舎・園舎が多く出現するようになりました。学校建築への社会的関心も高くなり、地域と学校の結びつきが改めて注目を浴びるようになった昨今、校舎・園舎の設計も教育委員会任せではなく、学校・幼稚園教諭や地域の人々、保護者などの見解も含め、幅広い設計者が手掛けるようになりました。園舎に限定すれば、大手

の幼児向け教材販売会社の設計部も変更可能な基本プランを提案するようになり、各幼稚園の保育実践の内容・方法に応じた園舎の実現を目指しています。

また、園舎を専門としない建築家も園舎に興味心をもち、設計に積極的に協力し、園長・保育者の希望や夢を実現する助けをするようになりました。

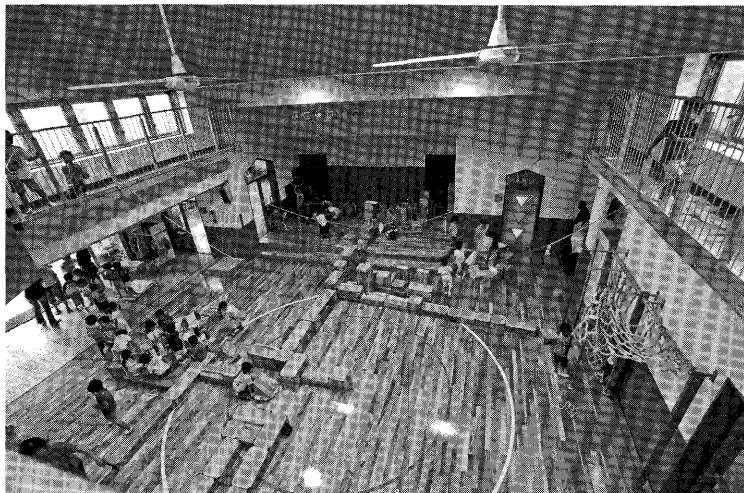
最近出合った一つの園舎を、ご紹介したいと思います。金沢市長町にあります**木の花幼稚園**は、明治三十八年（一九〇五）に開園した歴史ある私立幼稚園ですが、幾つかの民家代用園舎を経て、平成二年（一九九〇）に現在の園舎を新築しました。設計は、地元の設計事務所に依頼されました。自分自身も卒園生の理事長は、自分が育ち、暮らし、愛してやまない長町の家並みの景観を生かした園舎を希望しました。園長は、空き室の多かった旧園舎時代から行われていた、自由でのびのびした保育の特徴を活かせる園舎を望んでいました。設計者は、幼稚園に

何度も通い、この幼稚園ならではの保育を十分に理解するよう努めたことに加えて、自分が描いていた夢をここに実現するべく、情熱を傾けました。関係した全ての人々の思いが結集して建てられた園舎は、この幼稚園の保育理念や形態にぴったりとマッチし、驚くほどダイナミックな活動が園舎の内部で展開しています。この園舎内で遊ぶ子どもたちの姿を見ていますと、園舎は決して雨風をしのぐだけのものではないことに、改めて気づかされます。

前述の「ゆかり文化幼稚園」と、「木の花幼稚園」の園舎はまったく異なるものですが、両者に共通する点が幾つかあります。

一、理事長・園長が強いこだわりをもち、それを受け入れ理解しつつ自分の夢も同時に実現しようとする設計者の存在。

二、機能一辺倒ではなく遊び心があり、あたかも子どもたちに「一緒に遊ぼうよ」と語りかけて



▲木の花幼稚園 遊戯室全景 広場としての機能をもつ遊戯室（子どもたちの遊びをつなぐ）

くるようであること。

三・大勢が集う「広場」的な室を中心に、その周囲に子どもたちが一人になったり休んだりする「居場所」的な保育室などが配置してあること。

四・子どもにこびた色彩やデザインが、まったく施されていないことなど。

豊かな園舎を創るには……

園舎の中で楽しく遊び、生活する子どもたちの姿を見ていると、園舎には子どもたちの主体的な活動を促す力、子どもと共に遊ぶ力さえ宿っていると思います。何をもって「豊かな園舎」とするかは、各幼稚園によって異なりましょう。けれども、まずは保育者が園舎に目を向け、自覚して園舎と対話をしなければ、豊かな園舎は生まれえないと思うのです。

（聖学院大学 人間福祉学部 准教授

教育実践史・幼稚園建築史）